

物理的な一貫性と歴史的な一貫性の境界面としての意識 —チューリングの光と影を越えて—

川津 茂生

国際武道大学

一貫性の領野を論理的な世界から倫理的なものを含む世界へと拡大することで、計算の一貫性に過度に依存している現代の科学的な視野を、より一般的なものへと深化できる。一般的な一貫性の観点から考察することで、論理的な一貫性の行き詰まりが対面的な一貫性へ次元変換されて生命的な一貫性が誕生し、その延長線上で、物理的な一貫性から歴史的な一貫性への次元変換により物理的世界を越える意識が生まれた、と想定できる。

Keywords: 一貫性、論理、倫理、対面的関係、意識

論理的な一貫性の探求

一貫性というものは、基本的に論理の一貫性でなければならないということから、論理的な一貫性の探求というものが始まったのだと、考えられる。したがって、論理学というものは、一貫性の不備を見つけて、それを修正し、より完全な一貫性を追求するという営みであったと言える。しかし、そういった研究の背景には、一種の先入観があったのではないだろうか。というのも、一貫性を探求する場合、その領野を、論理的な世界に限定するのは、もっとも一般的な立場とは言えないからである。

もちろん、ある知的世界を構築して行く場合、それを表現する言語的で理論的な構築物が、一貫性を持たなければ意味を持たない。そこに当然のこととして、一貫性の要求というものが現れてくる。そして、言語的な一貫性は、ロゴスの一貫性ということから、ロジックの一貫性ということへと、洗練され、また深化されて、真の一貫性になって行くのだと理解されて来た。

そういった流れの中で、論理は、次第に洗練されて、形式的な論理へと成長し、さらには、数理的な論理、そして、計算論的な論理へと、変貌を遂げた。チューリングの業績は、そういった形で形成されて来た論理的な一貫性を、実際的に、機械的に実現して行く道を開いたことだと言えるであろう(デイヴィス, 2016)。そこから、コンピューテーションによって、実際に表現し、また計算できるということが、理論的な構築物が一貫性を持ったものであることを、十分に保証しているのだと、考えられるようになってきたことは、当然のことだと言える。

一般的な一貫性の領野へ

一貫性というものは、しかしながら、論理的な次元にのみ言える事柄ではない。それを示す、もっとも分かりやすい事例は、倫理的な次元における人格的な応答関係での一貫性である。倫理的な一貫性は、一般的には「誠実さ」として理解される。この倫理的な誠実

さは、論理的な一貫性を越える場合があり、それを論理的に解析することは、倫理的な一貫性の持つ意味を損ねてしまう。

今、人称の観点を導入すれば、論理的な一貫性とは、一人称に限定した一貫性か、あるいは、三人称に限定した一貫性であって、二人称的な観点から見た、対面的な状況での応答的な一貫性というものを、包摂して行くことができない。とすれば、一貫性というものを、論理的な次元に限定することは、人称理論的な観点からすれば、特殊な一貫性にすぎないものに限定した部分的な領野に、研究の視野を狭めてしまうことになる。

もしも、学問的な世界をもっとも一般的な基礎的領野から見直して行くということ、情報科学が成し遂げようとするなら、そのことの持つ根本的な問題性は、コンピューテーションによる論理的なものの厳密な基礎付けというものが、実は、特殊な一貫性に過ぎないものを研究しているのにも関わらず、一般性を僭称してしまうことになるということであろう。

一般的な一貫性というものは、論理ばかりでなく、倫理的な次元をも含む、全体的な一貫性でなければならない。そういった一般的な一貫性の領野から考察をすることで、意識というもののマイクロ理論の可能性も開けてくるのではないだろうか。

一貫性の次元変換としての意識

論理的な世界やコンピューテーションの世界に限界があるということは、一定の形で知られている(高橋, 2014)。しかし、むしろ、そのコンピューテーションが止まってしまうところでこそ、対面的な一貫性というものを形成している歴史的な世界が、一貫性というものを、物理的な次元から歴史的な次元へと変換し、生かし直しているのではないだろうか。計算が停止したり、無限に反復したりして、計算としては行き詰まるところで、むしろ、その反復するプロセスによって、再帰性あるいは自己回帰性が出現する可能性が生じる。再帰性あるいは自己回帰性が、物理的な次元から、歴史的な次元へと、変換されて行くのである。そこに、自己内反省をも含む内部世界が現れるのではないだろうか。そこにおいて、歴史的な世界の持つ二人称的な関係性の一貫性が、三人称的な物理的な世界の一貫性

と交わることで、二つの異なる一貫性の境界面が出現する。その境界面における反復性や再帰性が、自己内反省をも可能にする意識を生み出す。

つまり、メカニカルな一貫性が止まってしまうところで、そのいわば故障している部分を、環境世界との関係性における対面的な一貫性の次元が、こちら側の関係性の次元へと強引に引き込み、こちら側の一貫性から見て十分に機能し得る、高次の一貫性へと変換して行くのである。したがって、そこで回復した一貫性は、物理的な背景を持ってはいるが、一貫性としては、歴史的世界の対面的な一貫性なのである。物理的なレベルで一応実現していた論理的な一貫性が、不十分さを露呈して行く場所で、対面的な関係性における、いわば倫理的な一貫性が、それを包み込み、一般的な一貫性の領野において再生して行くのである。一貫性を、論理的な一貫性に限らず、倫理的な一貫性を含む、本来の普遍的な一貫性へと解釈し直すなら、計算論的な論理の一貫性が保てない場合に、より普遍的な次元で補完されて、生かされるということは、十分理解できる。

物理的で即自的な一貫性が、歴史的に形成された環境世界との交流の中で、意識の創出によってのみ機能する、倫理的な一貫性によって包み込まれ、即自的には機能できない部分さえもが、高次の水準で機能する、生命的な一貫性へと生まれ変わって行くのである。それが、対面的な世界に生きる、意識を持った生命体を維持して行く、本来的な一貫性なのである。言い換えるなら、二人称的な受容性に包まれ、その呼びかけに応答するものとして、一人称的な意識が出現することによってのみ、三人称的な物理的な次元で機能する計算システムの行き詰まりを、実効的に機能するものとして回復させ、生かし直すことが可能になって行くのである。生体が、メカニカルにはいわば故障している部分を、機能的に回復させることを目指すことが、環境世界の二人称的な受容性に応答する一人称性の創出を実現させたのである。

進化と一貫性の次元変換

生命が誕生した時から、生体のメカニカルな面だけでは必ずしも完全には機能できない面があって、その不十分さを、何らかの形で補い、十分に機能させるためには、物理的なメカニズムを乗り越えるような、言ってみれば、何らかの原始的な人称性の飛躍のようなものが生じる必要性があったのではないだろうか。進化の初期には、もちろん、一人称と呼べるようなものの、創成的出現はなかったとしても、そういったものを予兆するような、何らかの、質的なレベルでの一貫性の次元変換といったようなものがあつたのであろう。それが、生命というものにわれわれを感じる、生命的なものの本質なのではないだろうか。

数十億年の進化のプロセスの中で、生体の持つメカニカルな不十分さを補うために、環境に対する対面的な、原始的な人称性の創出ということがあつた。つまり、そういった方向性で、対環境的な、対面的な面というものが現れて来て、初めて、メカニカルなレベルだけでは行き詰まってしまう部分が、いわば、強引に、

実効的に機能するようになった。それは、いわば、一貫性の新たな次元創出とも言えるようなことであつて、そのはるかな延長線上に、倫理的な対面関係すなわち対人格関係というものも出現した。そのプロセスで、物理的な一貫性と歴史的倫理的な一貫性が、複雑に相互作用をして、物理的な一貫性の歴史的な一貫性への次元変換が可能になり、そこに意識が出現したのであろう。

そのような複雑な一貫性の次元変換を、計算という特殊な一貫性によって再現することは、不可能だと思われる。それが実現するとすれば、おそらく、数十億年の進化のプロセスを再現しなくてはならない。

脳における一貫性の次元変換

脳ということに戻れば、脳内の計算システムと安定化作用のシステムは、分離したシステムではなく、相互に融合したシステムである。そのことが、計算の行き詰まりを、計算を越えて実効性を持つものへと変貌させることを可能にしているのかもしれない。脳のコンピューテーションは、常に故障しているのだが、その故障している部分こそが、安定化作用によって、実効的になって行く。対面的な一貫性が物理的な一貫性を補完できるのは、安定化作用による計算システムへの侵入可能性が確保されているからではないだろうか。

結語

論理というものに関心を集中してきたことで、コンピュータという計算をする機械を、人類は手に入れた。しかし、そのことは、一貫性の領野というものを、論理的なものに限定してしまうという、弊害を産んだ。もし、知的な世界というものを、本当に一貫性を持った世界として構築しようとするならば、一貫性の領野をより一般的で普遍的なものへと拡大しなくてはならない。その際、対面的な関係性の世界というものを、考慮に入れる必要がある。そうするならば、そこにおける一貫性は、論理的な世界を越えて行くのである。その高次の一貫性は、論理的な計算が行き詰る場所で、むしろ本領を發揮する。そこにおいてこそ、物理的な世界を越えた意識が生まれるのである。しかし、この理論は、あくまで理性的であつて、論理は越えるけれども、一貫性は越えない。理性を論理的なものに限定する必要はないのであつて、むしろ、一貫性の領野をより一般的なものへと拡大することは、理性の理性たる所以をより確かなものにするのである。チューリングの光と影は、一貫性の一般的な理論によって、越えて行くことができるのである。

引用文献

高橋昌一郎 2014『ノイマン・ゲーデル・チューリング』筑摩書房。

デイヴィス, M 2016『万能コンピュータ ライブニッツからチューリングへの道すじ』近代科学社。